

いわくらの山車

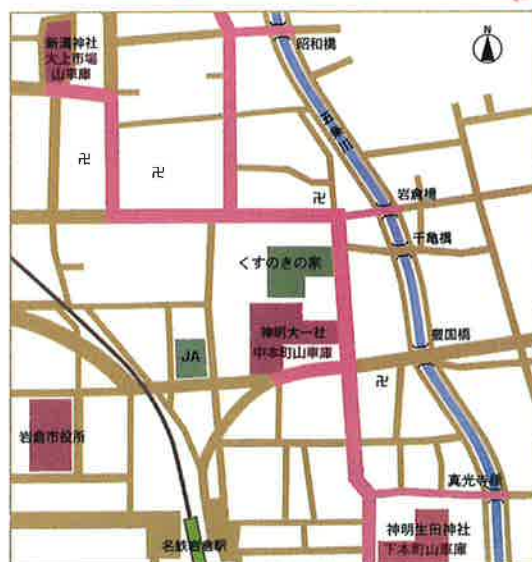
からくり人形が語り継ぐ、岩倉のまつり。



岩倉の山車

岩倉には3台の山車^{だし}があり、大上市場・中本町・下本町の3町で、それぞれ「新溝神社」「神明大一社」「神明生田神社」の祭礼にあたり別々に曳き出されていましたが、本来は3台とも神明大一社で行われる「岩倉祇園祭」の山車でした。

また、構造は3段組になっており「犬山型」、輪懸けがあることなどは「名古屋型」というように犬山型、名古屋型の両方の特徴を合わせもっています。



岩倉の山車まつり

岩倉市の山車まつりといえは、まず祇園祭があげられます。

この祇園祭は、夏に流行する疫病^{えびき}を退散させる祭り^{まつり}で、牛頭天王を祀ることから天王祭とも呼ばれます。京都の八坂神社(祭神・素戔鳴尊^{すさのおのみこと})から都市型信仰の一つとして全国へ伝えられました。つまり、人が密集する所ほど伝染病が発生しやすくなるので、それを防除するために祭りを始めたのです。

明治時代までは、3台の山車がそろって祇園祭を彩^{いろど}ってききましたが、

その後、しだいに別々の祭りとして行われるようになり、昭和30年代の中ごろには、山車の姿も見ることができなくなりました。

その後、平成3年の市制20周年を契機として3台とも復活し、平成4年には念願の岩倉街道で3台の山車の揃い曳^{そろひびき}が実現されました。現在、桜まつりにおいて3台の山車の揃い曳が行われています。



岩倉市教育委員会

岩倉市栄町一丁目66番地



大上市場

大上市場の山車は、『柴田文書』には、江戸時代の寛永6年(1629)に制作されたとあります。水引きは、尾張藩の御用絵師であった山本梅逸(1783~1857)の手によるものです。

大上市場の山車には、からくり人形が4体あり、四本柱内に「けんじょうとうりつ肩立倒立」(2体)と「らんぐいわた乱杭渡り」(1体)二層の正面に「ざいふりざいふり」(1体)があります。



肩立倒立 Kenjo-Toritsu

「けんじょうとうりつ肩立倒立」は、大唐子と小唐子の2体で演じるものです。大唐子は右手に鉢桴(ばち)、左手に太鼓を持ち、小唐子が左手を大唐子の肩の上へつけて逆立ちをして、太鼓を叩くものです。



乱杭渡り Rangui-Watari

「らんぐいわた乱杭渡り」は、唐子が高さの異なる杭の上を次々に渡っていくものです。

このからくりは他に、犬山と碧南にあるだけです。



中本町

中本町の山車は、『柴田文書』には、寛永3年(1626)に作成されたとあります。水引きは、名古屋を代表する江戸時代後期の画家、渡辺 清(1778~1861)の手によるものです。

中本町の山車は、からくり人形が4体あり、四本柱内に「なすのよいち那須与一」(1体)と「ちりりチリリ(回転)」(2体)の2種類と、二層目に「ざいふりざいふり」(1体)があります。



那須与一 Nasuno-Yoichi

「なすのよいち那須与一」は、弓を構えた与一が馬上に乗り、船の上の日の丸扇を的にして与一が矢を射るというからくりです。



チリリ(回転) Chiriri

「チリリ(回転)」は、アブラヤノイヒョウサと唐子とで演じられ、アブラヤノイヒョウサが台に乗った唐子を背負い、枝の^{あやぼう}綾棒へぶら下がらせ、唐子が綾棒で大回転を演じるというものです。



下本町

下本町の山車は、岩倉の山車の中でも最も歴史が古く、『柴田文書』には、寛永2年(1625)に制作されたとあります。

下本町の山車には、からくり人形が5体あり、四本柱内に「かんしょうじょう菅丞相」(2体)と「からこあそび唐子遊」(2体)と、二層目に「ざいふりざいふり」(1体)があります。



菅丞相 Kan-Shoujou

「かんしょうじょう菅丞相」は、菅原道真のことで、鉢に植えられて咲いている梅の花を切り取るというからくりです。

唐子遊 Karako-Asobi

「からこあそび唐子遊」は、アブラヤノイヒョウサに肩車された唐子が登場し、蓮台に左手を着くと肩から離れ、唐子が倒立して^{かね}鉦を叩くというものです。

